



類題卷白百川集  
冬

~ 5  
4128  
4



門 5  
號 4128  
4-4

類題發句百川集初編冬之部

目錄

雪	四丁	十月	十九丁	神無月	神留主	初冬
小春	十六丁	小六月	十一丁	亥猪	達摩忌	翁忌
御命講		十夜		夷講	茶口切	爐開
火桶		火鉢		埋火	巨燧	圍炉裏
初時雨		時雨	三丁	冬紅葉	散楓	冬木立
冬山		冬枯	七丁	枯野	枯尾花	枯芒
草枯	九丁	枯菊		枯薦	枯蓮	枯芦
枯柵		落葉		木葉	風	茶花
山茶花	廿丁	歸花		麥時	細代	細代字

百川集

冬

千鳥	鴨 <small>丑丁</small>	水鳥 <small>丑丁</small>	浮寐鳥	鴛鴦 <small>甲丁</small>
鷓鴣	鶯子鳴	冬蠅	冬夜 <small>甲丁</small>	冬日
霜月 <small>甲丁</small>	神樂	御火燒	袴著	冬至 <small>甲丁</small>
報恩講	冬籠	霜 <small>甲丁</small>	初雪 <small>甲丁</small>	吹雪
霽	霰	冰 <small>甲丁</small>	冰柱	冬牡丹
冬菊	寒菊	枇杷花 <small>甲丁</small>	石落花	水仙
大根引 <small>甲丁</small>	風呂吹	蕪	切干	葱
納豆 <small>甲丁</small>	藥喰	乾鮭	鯨	鱈
生海鼠	河豚	牡蠣 <small>甲丁</small>	鷹	暖鳥 <small>甲丁</small>
十二月	臘八	寒入	寒梅 <small>甲丁</small>	早咲
冬椿	寒	寒聲 <small>甲丁</small>	寒念佛	鉢敲

冬月 <small>甲丁</small>	寒月 <small>丑丁</small>	炭	摺	蒲團 <small>甲丁</small>
衾	紙子	頭巾 <small>甲丁</small>	佛名會	師走
事納	古曆	曆賣	煤拂 <small>甲丁</small>	餅攪
節季候	年用意	年木樵	年忘 <small>甲丁</small>	年市
行年	歲暮	春待 <small>甲丁</small>	節分	年内立春
小晦日	大之日	除夜		

附録雜之部甲丁 面替名所神釋祝等本節即あらわら  
右に記し置入りまゝに全くとすのちを記す

以上四時六百四拾餘題惣句數五千六百六拾余章

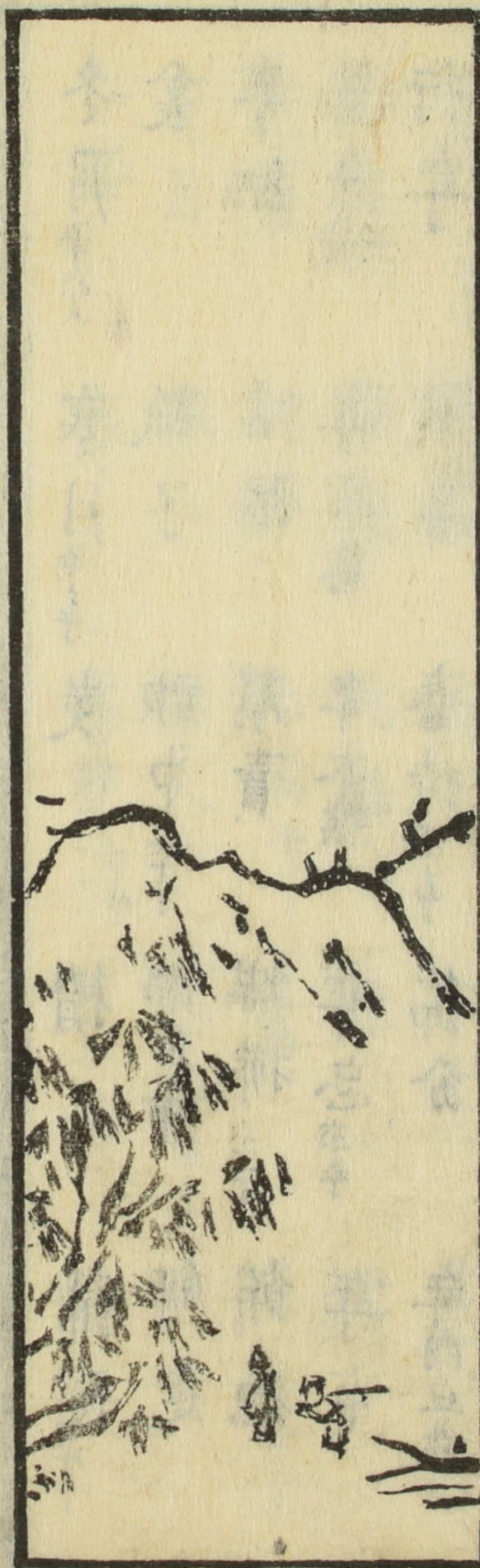


新雪の山に子

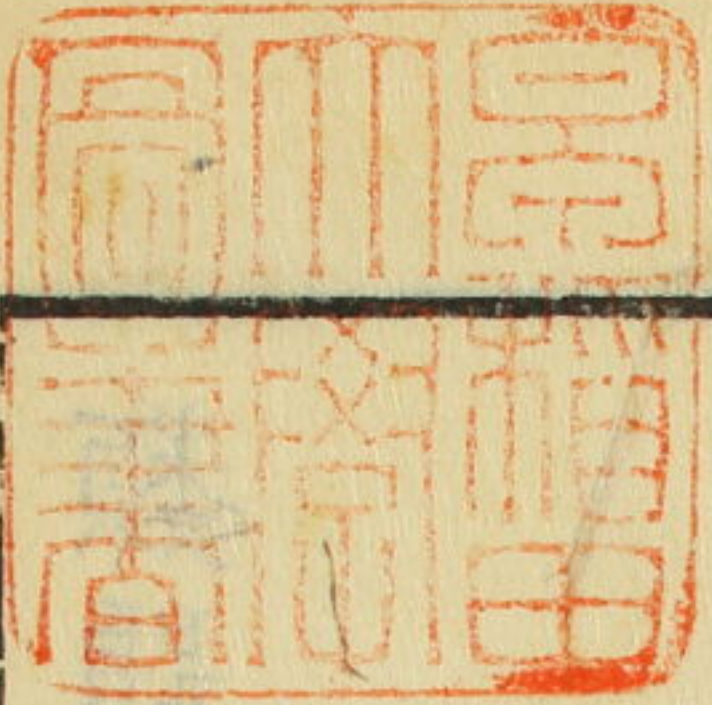
あせよ 櫻の家

きんぎょ 何写

山集



我<sup>カ</sup>雪とちの  
 うら くら せり  
 山集



人

たふたふ

たふたふ

たふたふ

たふたふ

たふたふ

たふたふ

たふたふ

たふたふ

類題發句百川集初編冬之部

泮水園芹舎輯  
獨笠翁飄齋校

雪

我國の花の癖ありまはれ  
 ちまゆきまはれまはれまはれ  
 松のおちたあふさそふり  
 冬もこたあふさそふり  
 大正  
 海苔の葉をまはれまはれまはれ  
 梅室



冬のもはれまはれまはれ  
 降るよめまはれまはれまはれ  
 秋もまはれまはれまはれ  
 秋もまはれまはれまはれ  
 秋もまはれまはれまはれ  
 秋もまはれまはれまはれ

雪見漫興

お春もまはれまはれまはれ  
 左様もまはれまはれまはれ  
 暖かやまはれまはれまはれ  
 お刺刀もまはれまはれまはれ  
 西月

為動をうてり雪あつた彦彦  
 ちりや公おろけ一越り雪  
 由まのや彦彦不越る山刃  
 雪をを浮めく折れぬ地  
 情一もたへく地味も雪の夕久  
 衆入るち雪を雪の夕久  
 一袖を雪を雪の夕久  
 ゆき雪の力もたれ松乃勢  
 薄小まを雪の夕久  
 舟はまを雪の夕久  
 海も雪の夕久

木海  
 升六



幸を雪うてり雪あつた彦彦  
 ちりや公おろけ一越り雪  
 由まのや彦彦不越る山刃  
 雪をを浮めく折れぬ地  
 情一もたへく地味も雪の夕久  
 衆入るち雪を雪の夕久  
 一袖を雪を雪の夕久  
 ゆき雪の力もたれ松乃勢  
 薄小まを雪の夕久  
 舟はまを雪の夕久  
 海も雪の夕久

萬和  
 南溪

世南  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを

梅居  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを  
 ちかひなく けふも ぬのの みのを  
 ねの せまが けふも ぬのの みのを



かねていふもやうな海舟の果て  
 たる天下一の雲もかきよみたる也  
 おもひ遊一もまをりて又宿の梅  
 庭と後の中不接あしと影の雪  
 あけあめやあつとあつとあつと  
 花さつとさつとさつとあつと  
 雪掃やあつとあつとあつと  
 日のあつとあつとあつとあつと  
 夕暮あつとあつとあつとあつと  
 月あつとあつとあつとあつと  
 白くあつとあつとあつとあつと

士朗

秋舉

嶺のたふさくをたぬくも雪見れ  
 木さくの庭しんかぬくのも  
 行庭あけくもさくたぬくも  
 あつとあつとあつとあつと  
 花さつとあつとあつとあつと  
 雪掃やあつとあつとあつと  
 日のあつとあつとあつとあつと  
 夕暮あつとあつとあつとあつと  
 月あつとあつとあつとあつと  
 白くあつとあつとあつとあつと

卓池

岳輪

椿堂

道彦

茶

茶

〜〜〜  
葉のさへくさ〜  
雪のふり〜  
かきや〜

山吹丘眺望

ま〜  
雪の〜  
ゆ〜  
ふ〜  
ふ〜  
ゆ〜

鳳朗

蒼虬

も〜  
は〜  
ゆ〜  
顔〜  
何〜  
か〜  
雪〜  
け〜  
る〜  
大〜

✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓

刀の白くうろ雪の朝やと樹の海

蒼虬

群鷗亭雪見

かく降る雪のそよ風も長き 庭の松  
雪の娘を体むる 十丈は 皇國を

✓

播磨の雪

降たぬ雪をぬるのよあ那  
大雪く 朝のりか 朝の雪のさす

✓

西風の雪をぬるのよあ那

細呂末の雪をぬるのよあ那

雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす

武 陵

中次くう雪のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす  
雪のりか 朝のりか 朝の雪のさす

一 具  
祖 卿  
多 代 女  
✓ 呂 鳳  
✓ 惟 草  
水 竹  
✓ 苙 石  
✓ 月 底

板敷や おもひたつらぬ豆腐お  
 吹ぬわくは庭にゆめやまよの上  
 雪まをれや人ささごもあふのま  
 山々雪掃ふゆめくはあはるま  
 志しきお侍さしはてまはつる梅  
 掃ちうるにさるや秋こそちの雪  
 大雪お火くつくつくたおにゆ  
 かふ空を舞ふは遊まやまきり  
 横むやあふるらるる乃即ちさる  
 二にふまゆくおやあふの世果  
 敷院やふらりくとおまはす  
 而 后  
 旭 嶂 知  
 我 竟  
 鳥 津  
 挑 里  
 黄 山

落ゆまや 誰かおのろく 梅 山  
 庭の庭をわたり秋のや枝のき  
 移つるのまはしるるあふる那  
 川上や 掃ちまはさるふらりく  
 一度りのきく 雪もあふの里  
 おこちりく 掃ちあはるや雪のき  
 まあにさるたゆめやほのま  
 横むるにさるはるるあふる  
 吹ぬわくは庭にゆめやまよの上  
 雪まをれや人ささごもあふのま  
 山々雪掃ふゆめくはあはるま  
 志しきお侍さしはてまはつる梅  
 掃ちうるにさるや秋こそちの雪  
 大雪お火くつくつくたおにゆ  
 かふ空を舞ふは遊まやまきり  
 横むやあふるらるる乃即ちさる  
 二にふまゆくおやあふの世果  
 敷院やふらりくとおまはす  
 李 裳  
 梅 裡

降雪此新白くもや池の底  
 靄はく湯室にそよふたは  
 ねしやあやしく申うら華や雪の染  
 随く雪はきりりもえの雪の底  
 指草の草吹くくもはの雪  
 汐さひまきくもあや雪の海  
 唯乃雪もきりりもく雪の海  
 降あはく雪はくくも雪の海

多度姫守

思文 挑秀 庭里 青冬 一止 爲中 茶静 梅曦 雀叟

月影を指うけくもや一原の雪  
 横む雪や大竹原をまよふ  
 雪もくあやしくあや雪の海  
 月の出のあやしくも雪の海  
 月影を指うけくもや雪の海  
 雪もくあやしくあや雪の海  
 雪もくあやしくあや雪の海  
 雪もくあやしくあや雪の海  
 雪もくあやしくあや雪の海

一幽 子遷 月坡 鶯洲 楓下 礪山 挑谷 藏六 柏翠 石堂 墨池

伊豫



其翠のまはるや雪のわくし松  
梅のけし人さうましくおれ  
我はに合ふ所し松や雪のわ  
くさくさとおどむ小野乃鳥  
破風白く旭きけまの雪の  
二井一古塚也

其翠  
奇鼎  
梅敬  
松朗  
芥舎

凡おりのやゆきをまはる海  
梅の雪さき雪あけし一抗  
五ふおさつて切りぬ雪の  
夕のやきうぬまの雪あふ

✓  
✓  
✓  
✓  
✓

十月

十月の節日ありきく  
十月や海に雪あり松の  
十月やよまのりて赤く  
中夜の中はすなを雪は  
十月やお山へ獲る小野  
十月やまをわたり小野  
十月の朝をうぬるの松  
十月や梅しきふす松  
十月の雪の松は  
神無月の焚き火の  
神無月のゆきくまぬ

篤老  
蒼虬  
一茶  
甘谷  
秋湖  
桃谷  
芥舎  
護物  
鳳朗  
世南

神無月

神留主

昔さうふ新ひりや神さく内  
 縁減ふ日新まらりとと正月  
 池へ橋かけくまのまら月  
 さく新く早まのまら神さく  
 ちのひよりまのまら神さく  
 二の月神の西面まらまら  
 下り橋ふ橋まら神のまら  
 かたのひよりまのまら神のまら  
 そのまらや河のまら神まら  
 初まらや花のまら神のまら  
 神まらや新築まらまらまら

篤老 沙鷗 挑里 涼呼 一茶 鳳朗 篤老 其翠 抱儀 梅通 芹舎

初冬

小春

阿僧く何を小まの浦の鞠  
 教掃く良まを定りく小まを  
 白帯持る神後へまをまら  
 けりく小まをまらまらまら  
 海へ海ま小まをまらまら  
 うまの守の神まらまらまら  
 指向けまらまらまらまら  
 花まらの出まらまらまら  
 ちまらまらまらまらまら  
 高の海まらまらまらまら  
 築むく一人まらまらまら

蒼虬 木海 奇淵 一茶 鳳朗 西月 沙鷗 梅室



小春のやけぬふりちくるれ上 江都

刈りこむ一田に盤詰の小春のれ 多代女

穏くくさるる日なきふふをい 枝月尼

籠子持ふみふ山つりく小春の身 杜蓼

くちやくと矢槍をまゝ自れ小春の 丹波 賣雪

小春の思や寄る人小春の思きり 虚栗

何れも懐く懐く本にせ小春の 竹月

湖上 芥舎

さきくくはるのなほれはる小春の 芥舎

膳山は遠くさう袂をさるる 芥舎

小六月

抽喚く知もあよ小六月 鳳朗

毛をさらちるさるめ坊の小六月 蒼虬

換りぬあひのさくは小六月 沙鷗

立ちたうらぬれく馬さるのあ 芥舎

たもさるるさるるく坂さるる 木海

たもさるるさるるく坂さるる 蒼虬

さるるさるるさるるく坂さるる 梅室

年あつちつち我伸さふさるる 梅室

抽喚く知もあよ小六月 芥舎

あめのひささるるくさるる 芥舎

御命講

夜半の松梅のほゆや御命講  
心合し海あふり萩のよき山

篤老  
木海

物言ふありき

十夜

小湊のよき御命講  
御言ふ十夜ありの小湊長安  
常つとせしややあの人乃與  
あつふふとや十夜のをり  
常のよきありありありありあり  
汁梅一室のよき十夜あり  
のよきありありありありあり

一具  
道彦  
鳳朗  
雀叟  
柳斐  
杜夢  
文翠

燈子襪

夷講

茶口切  
爐閑

海をよき御命講  
御言ふれん言ふありき  
遠坂をよき御命講  
あつふふのよきありき  
一室のよき御命講  
紙のよき御命講  
順のよき御命講  
吉物をよき御命講  
常のよき御命講  
口切や折ありき御命講  
あつふふのよき御命講

鳳朗  
梅室  
蒼虬  
大江丸  
篤老  
嵐外  
卓池  
楓下  
芥舎  
一具  
鳳朗



初時雨

とくもなれ路をさるるのよき時  
思ふにゆく時をさるるよき時  
我の心は初時雨よき時

小兼中よき時

春の心は初時雨よき時  
秋の心は初時雨よき時  
冬の時よき時  
梅の心は初時雨よき時  
竹の心は初時雨よき時  
草の心は初時雨よき時  
池の心は初時雨よき時

士朗

鳳朗

蒼乳

初時

春の本の心は初時雨よき時  
秋の本の心は初時雨よき時  
冬の本の心は初時雨よき時  
梅の本の心は初時雨よき時  
竹の本の心は初時雨よき時  
草の本の心は初時雨よき時  
池の本の心は初時雨よき時

梅室

蕉老

木海

一茶

素檠

卓池

梅のついでに二葉のあはれを  
 たへてあはれはあはれに  
 降るあはれはあはれに  
 空のあはれはあはれに  
 有節のあはれはあはれに  
 海へあはれはあはれに  
 大川や海へあはれはあはれに  
 夕暮のあはれはあはれに  
 花のあはれはあはれに  
 牛車はあはれはあはれに

時雨

可都里  
 世南  
 空阿  
 有節  
 百古  
 芥舎  
 梅室  
 牛車

夕暮のあはれはあはれに  
 花のあはれはあはれに  
 牛車はあはれはあはれに  
 海へあはれはあはれに  
 大川や海へあはれはあはれに  
 夕暮のあはれはあはれに  
 花のあはれはあはれに  
 牛車はあはれはあはれに

別府の松

鳳朗

遠く見ゆ十秋も来を海時  
一ののちのちのちのちのち

阿そくくくくくくくくく

途申し七二の道  
志方おぬぬぬぬぬぬぬ  
おまも海とくくくくくく  
時くくくくくくくくく

竹葉軒

さけりくくくくくくくく  
山さけりくくくくくくく  
相傳くくくくくくくく

道彦

▽

一茶

七二

雄淵

士朗

▽

▽

吉野くくくくくくくく

りくくくくくくくく

一くくくくくくくく

少くくくくくくくく

吹くくくくくくくく

志くくくくくくくく

あくくくくくくくく

時くくくくくくくく

ちくくくくくくくく

五抱くくくくくくく

卓池

椿堂

沙嶋

▽

▽

一岬とほほみちの〜  
 志ろ〜  
 けい〜  
 物〜  
 一岬の〜  
 松の〜  
 夕の〜  
 白葛の〜  
 如板の〜

氣比宮

蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬  
 蒼虬

志ろ〜  
 下ろ〜  
 泉涌〜  
 古の〜  
 親印〜  
 松ま〜  
 晴澄〜  
 一岬〜  
 古の〜  
 古の〜  
 百の〜

西月  
 干當  
 鳥頂  
 萬和  
 萬和  
 萬和  
 萬和  
 萬和  
 萬和  
 萬和  
 萬和

葵亭  
 篤老  
 木海  
 世南  
 海松ぬきぬお希志あはるに川  
 一しるれはの強みやあのは  
 事前とやあはのあはる  
 時よあはるあはるあはる  
 志あはるあはるあはるあはる  
 世南あはるあはるあはるあはる  
 一しるれはの強みやあのは  
 事前とやあはのあはる  
 時よあはるあはるあはる  
 志あはるあはるあはるあはる

世南  
 軒舟已過萬葉山  
 志あはるあはるあはるあはる  
 時よあはるあはるあはる  
 志あはるあはるあはるあはる  
 一しるれはの強みやあのは  
 事前とやあはのあはる  
 時よあはるあはるあはる  
 志あはるあはるあはるあはる  
 世南あはるあはるあはるあはる  
 一しるれはの強みやあのは  
 事前とやあはのあはる  
 時よあはるあはるあはる  
 志あはるあはるあはるあはる



志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 一しるるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴

世南  
 梅居  
 南溪  
 菊洲

と糸言

おもむ極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴  
 志るるもやふるも極ての山成り  
 ぬらぬらとせむ投せしぬ鷗鶴

松隣  
 素屋  
 柳吾  
 多代女  
 而後  
 梅裡  
 之岳  
 百口  
 一具

秋香女

杜蓼

其翠

芥舍

松中

湖の白と松の下

長命寺

冬紅葉

散楓

今山

齊堂

秋香女

杜蓼

其翠

芥舍

松中

湖の白と松の下

長命寺

冬紅葉

散楓

今山

士朗

冬木立

雪のうらみも草のあはれも  
いづれも春の来りては  
山も木も門を過ぎぬ  
心も人も一葉の葉や  
かたじけなくも  
代も後人も人の子  
情も毒を根もや  
牛の尾は物もけり  
後へ餅もあはれ  
情もいづれも  
星もあはれも

蒼虬 椿堂 葛三 士朗 秋舉 烏頂 芥舎 萬和 擲堂 綺石

冬山

雪のうらみも草のあはれも  
いづれも春の来りては  
山も木も門を過ぎぬ  
心も人も一葉の葉や  
かたじけなくも  
代も後人も人の子  
情も毒を根もや  
牛の尾は物もけり  
後へ餅もあはれ  
情もいづれも  
星もあはれも

冬枯

雪のうらみも草のあはれも  
いづれも春の来りては  
山も木も門を過ぎぬ  
心も人も一葉の葉や  
かたじけなくも  
代も後人も人の子  
情も毒を根もや  
牛の尾は物もけり  
後へ餅もあはれ  
情もいづれも  
星もあはれも

飄齋 蒼虬 卓池 梅裡 挑五 文翠

枯野

枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角

士朗  
 道彦  
 成美  
 葛三  
 蒼虬  
 世南

枯野

枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角  
 枯野の一角

木海  
 沙鷗  
 鳳朗  
 梅室  
 多代女  
 東豊  
 芥舎

枯尾花

鎌倉より海道の程は行す

川海りとあつておぼろかり枯尾花  
かゝるこゝにわたりて尾花  
花もたや町にうらむ枯をたれ  
海もさきとあはれ久し枯尾花  
凡てまゐる今影の拍もや枯尾花  
都のえり似れ花はあけ枯尾花  
一まじちの折運は度路の枯尾花  
風折もたにうれさる尾花  
刈り程もたてや時乃枯をさ  
枯くは都の志流ふすも花は

鳳朗  
梅室  
蒼虬  
世南  
何頼  
竹有  
甘古  
芳英  
沙鷗

枯芒

草枯

菊枯

枯蒿

枯蓮

枯芦

中ちり一は柄の似たり枯落  
吹く風の度さく枯くははる  
道くは草の枯く我々の歌  
女房は何の園果く枯くはる  
生らるる葉もさく枯くはる  
くはるや大空をさく中ちり  
たのむは花はくといは枯くはる  
河海は草々枯くはる理道  
枯くはる中ちり浦に枯くはる  
枯あや奪くはるはるはる  
陽景のさくはるはるはる

梅室  
木海  
一茶  
鳳朗  
道彦  
鳳朗  
梅室

百集

八十九

枯柳

空より下る徳村の柳の枝はうらり  
枯葉のふたりの道に秋を告げたり  
さうの枯葉はふたりの道に秋を告げ  
いらぬ枝は一葉のちうとくは秋  
友を告ぐ柳の枝はうらり  
葉を告ぐ柳の枝はうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり

士朗 月居 道彦 鳳朗 梅室 世南 蒼虬 篤老

落葉

田中 中柳一色のあかり  
道板のうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり  
あかりのうらり

士朗 卓然 沙鷗

落葉のしづかき海ありしるの心  
 降ありて来れし白くふれたり  
 ひと目もあてく報なくもたす  
 地ちよの後おもひくもなきれ  
 揮ひてしづかき中もなきれ  
 遠坂やもなきれくもなきれ  
 おちて葉もなきれくもなきれ  
 田のちよもなきれくもなきれ  
 火のしづかきくもなきれ

一 茶  
 鳳 朗  
 秋 舉  
 鳥 頂  
 梅 宇  
 而 后

花深遠境坂本時

木葉

山のちよもなきれくもなきれ  
 落る葉もハなきれくもなきれ  
 白川の解もなきれくもなきれ  
 柳のちよもなきれくもなきれ  
 清湖やもなきれくもなきれ  
 志のちよもなきれくもなきれ  
 是のちよもなきれくもなきれ  
 おのちよもなきれくもなきれ  
 くもなきれくもなきれ  
 海のちよもなきれくもなきれ

孤 松  
 呂 鳳  
 士 朗  
 葛 三  
 沙 鷗  
 鳳 朗  
 木 海

近々城の跡のまじりたる木の葉  
次々木枯葉のちりたる雪の  
掃さるる木葉のちりたる雪の  
葉大指のまじりたる木の葉  
多き木葉のちりたる雪の  
木の葉のまじりたる雪の

途中

孫一木の本のまじりたる雪の  
小鳥のちりたる雪の木の葉の  
枯葉のちりたる雪の木の葉の  
くらの井堰のちりたる雪の

蒼虬

南溪

世南

梅室

岱年

梅通

其翠

風

木枯や一里の松を吹く  
あつた木枯の源流のまじり  
風の吹く一里の松を吹く  
あつた木枯の源流のまじり  
木枯や松のまじりたる雪の

数行

こゝろに木枯のまじりたる雪の  
木枯のまじりたる雪の  
木枯のまじりたる雪の  
木枯のまじりたる雪の  
木枯のまじりたる雪の

蒼虬

丘高

椿堂

世南

月居



あつらひや海にたふしやう月  
木枝のつらやまをみるをえおろ  
風や日し〜 雲は愛く〜  
木よりや海原をわ〜 砂のり  
や七時よ又木枝のちらら〜  
木より〜やの階下〜 雀の舞  
こららの柳の影のや〜 鳳の  
木枝の目もさあ〜 大指  
木より〜やまのり〜 山の影の影  
あつらひの言はれ世報や雀の舞  
木枝やまを〜 吹けぬ〜 南

士朗  
沙鷗  
鳳朗  
篤老  
木海  
南浮

日暮る木枝の〜 雀の舞  
木よりや山の影の影の影  
あつらひの言はれ世報や雀の舞  
木枝の目もさあ〜 大指  
木より〜やの階下〜 雀の舞  
こららの柳の影のや〜 鳳の  
木枝の目もさあ〜 大指  
木より〜やまのり〜 山の影の影  
あつらひの言はれ世報や雀の舞  
木枝やまを〜 吹けぬ〜 南

梅室  
多代女  
梅裡  
樊外  
也然  
丈翠

茶井

茶花

あつらひみゆねの優れは破乃松

八幡蓮想寺あり

木枯し梅もあししり量れ

茶のむしあつらひ月のみひり

花のふも其れらのいふ茶のあし

茶のふもあつらひのあつらひ日のみ

茶のふもあつらひのあつらひあし

茶のふもあつらひのあつらひあし

茶のふもあつらひのあつらひあし

茶のふもあつらひのあつらひあし

茶のふもあつらひのあつらひあし

芥舎

士朗

道彦

木海

篤老

樗堂

西月

蒼虬

梅室

多代女

伊波保

抑湖

柏石

其翠

蒼虬

篤老

武然

梅室

山茶花

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

あつらひみゆねの優れは破乃松

伊勢

梅室

帰花

余の春もさうしてさうして  
 折るけりぬれぬれと  
 ちの程の力もさうしてさうして  
 山は山二つ後へさうして  
 帰るさうしてさうしてさうして  
 唯ちのぬれぬれとさうして  
 夕もさうしてさうしてさうして  
 海山は乃祖へさうしてさうして  
 飯もさうしてさうしてさうして  
 切もさうしてさうしてさうして

素 葉  
 鳳 朗  
 蒼 虬  
 世 南  
 梅 室  
 梅 通  
 芥 舎

麥時

麦もさうしてさうしてさうして  
 折るけりぬれぬれとさうして  
 入相やむさうしてさうして  
 上へ下へさうしてさうして

梅 室  
 世 南  
 梅 裡  
 素 屋  
 鳳 朗

細代

あゝさうしてさうしてさうして  
 水もさうしてさうしてさうして  
 折るけりぬれぬれとさうして  
 細代もさうしてさうしてさうして  
 何れもさうしてさうしてさうして

蒼 虬  
 世 南  
 鳳 朗

細代守

千鳥

千鳥の心やあはれなまはら  
 何れ寄さるも世をまはらば  
 ぬれやあはれ知るさぬ細代さ  
 如く千鳥の何れかよ細代さ  
 ときよあはれやあはれ代の知る  
 夕やけや小鳥をせてあはれさ  
 一体もくさるるあはれさ  
 風流んとくさるるあはれさ  
 ありあはれやあはれさ  
 松の上やあはれさ  
 西の月やあはれさ

篤老  
 木海  
 萬和  
 虚白  
 卓池  
 芥舎  
 蒼虬

浪入月をくさるるあはれさ  
 鳥居やあはれさ  
 川上やあはれさ  
 花やあはれさ  
 浦の月やあはれさ  
 花やあはれさ  
 群りてあはれさ  
 鳥居やあはれさ  
 物換りあはれさ  
 千鳥の心やあはれさ

鳳朗

鳥先  
 系はけく海なる海の神  
 門はくはく海なる海の神  
 敷えん子れと海なる海の神  
 入るる海なる海の神  
 如海川やちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 家組し海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 是れを海なる海の神  
 山なる海なる海の神

鳥先  
 玄蚌  
 萬和  
 月居  
 烏頂  
 木海  
 虚白  
 梧岩

三河の海

生海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神  
 ちなる海なる海の神

士朗  
 沙鷗  
 世南  
 素那  
 多代女

越後より

緑源ちやうのすゝめあはる  
春くと見んまふは浦の家  
くらうく女達のり千鳥さ

道彦

梅室

明石

物まゝしけ成りしとて  
は敷くま連中あまのり  
ぬしらの改めさうさ  
吹草のく山根もま  
まらめいんそおま  
羽裏さ白くぬあのか

朗風

堅石

飄齋

齋堂

鴨

産保やあり鴨やく星の影  
池を移くはあぬ

士朗

木曾川より

鴨の背よりあまのり  
一ゆり起て流るる小鴨  
矢投りたる日の入あり  
魚柳やあまのり  
はれや桂の下の鴨  
川橋やあまのり  
あまのり  
付波の岸の上

沙鷗

世南

乙二

乙二

乙二

蒼虬のつらきや鴨のつらき  
船のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
何れもつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき

蒼虬  
道彦  
木海  
虚白  
鳳朗

水鳥

水鳥のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき  
舟のつらきや鴨のつらき

梅室  
而右  
呂川  
多代女  
布雪  
芹舎  
道彦  
鳳朗  
申齋

あはれおぼやあつゝのうらさ  
こころをこころのうらさ  
水鳥の羽をよけぬく二日しく

護物  
蒼虬

みづあまのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

梅室

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

芥舎

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

桃下

鶯 鶯

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

蒼虬

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

世南

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

多代女

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

芳英

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

梅通

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

芥舎

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

鳳朗

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

鶯老

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

木海

あはれおぼやあつゝのうらさ  
あはれおぼやあつゝのうらさ

木海

鶯 鶯



蔓竹の影振くしるをきき  
蒼虬

結梅の目らと子指く鶴鶴  
梅室

起くの目らとみき  
梅室

本所町の世帯を空あつ鶴鶴  
梅室

あせらるおあつとあめみき  
梅室

横をるあつとあつとみき  
多代女

あつとあつとあつとあつと  
一茶

あつとあつとあつとあつと  
道機

あつとあつとあつとあつと  
沙鷗

あつとあつとあつとあつと  
孤杉

鶯子鳴

冬蠅

冬夜

あつとあつとあつとあつと  
士朗  
あつとあつとあつとあつと  
木海  
あつとあつとあつとあつと  
梅室

馬上吟

冬日

あつとあつとあつとあつと  
士朗  
あつとあつとあつとあつと  
鳳朗

小舟本家のあつとあつと

あつとあつとあつとあつと  
而后

十月廿六日

神迎

あつとあつとあつとあつと

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

霜月

神樂

御火焼

袴着

霜月七の日は松室  
 奇淵の書は松室  
 神樂の書は松室  
 御火焼の書は松室  
 袴着の書は松室

梅室  
 奇淵  
 鳳朗  
 松朗  
 梅室  
 秋香女  
 梅室  
 妙女

髪置  
冬至

報恩講

霜月七の日は松室  
 奇淵の書は松室  
 神樂の書は松室  
 御火焼の書は松室  
 袴着の書は松室

沙鷗  
 鳳朗  
 蒼虬  
 蒼三  
 梅室  
 篤老

冬籠

竹束の松風吹くゆきあり  
ぬぬ人ささくをまぢくを  
日一簾出く所りてふも  
乃くゆや山嵐人のを  
向の六月は出たりあを  
和くれ袖寄ふ友よあ  
をさか分別神るゆを  
神乃酒師の飯やああり

兼後儒居

蒼虬 篤老  
木海  
月居  
萬和  
世南

まよひのゆきをゆの  
あさつて元日とやあ  
あまのついであ  
二三百葱あつたやあ  
あを電たり小刀あ  
たつかりとゆき  
あはれくさる人  
信指志く海くた

葛三 鳳朗  
士朗  
椿堂  
烏頂  
南溪  
奇鼎  
文

竹ふけのさけのさけり  
あまのさけのさけり

梅室

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

芥舎

霜

蒼虬

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

白子の安き

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

あまのさけのさけり

梅室

玉璽里

表より一麦喰麻の豆は初  
うねりもあがり一うねりの折れ  
糸も粗やもくろくを係り客  
靴の音もあはれを切し  
海外乃怨もあはれを切し  
初雪や一や木陰はたはる

龍ヶ峯

無のやあやうに方々ぬ谷の雲  
残月やおおむらじは雲ゆく  
朝一とあやうに雲ゆく

士朗  
沙鷗  
西月  
鳳朗  
虚白  
多代女

而後  
蓬陽  
梅裡

初雪

遠き方一あやうに雲ゆく  
柔畑や一本樹ののしと雲ゆく  
昔々一雲のけしきあはれ  
あけかた初雪一や雲の原  
古畑や一やうにぬれぬ  
たのしみや人のあはれ  
初雪や一拂もぬれぬ  
たのしみや一はなれぬ  
初雪や一初雪はぬれぬ  
初雪や一初雪はぬれぬ  
初雪や一初雪はぬれぬ  
初雪や一初雪はぬれぬ

芳英  
禾明  
丈翠  
可尚  
芥舎  
士朗  
午心  
鳳朗  
沙鷗  
而後  
布雪

吹雪

雪の吹く神楽の音を聞く  
 萬和の月夜を照らす  
 吹雪の音は松林  
 今なきて昔も如く  
 山雲を捲きし海  
 野の草花を散らす  
 人の心も如く  
 あらと海門に  
 二重の波をたたき

木海 萬和 沙鷗 鳳朗 道彦 完來 蒼虬 西月 木海 南溪

霰

霰

梅人の心も如く  
 あらと海門に  
 二重の波をたたき

梅裡 蒼虬 西月 木海 南溪

氷

氷柱

梅人の心も如く  
 あらと海門に  
 二重の波をたたき

梅裡 蒼虬 西月 木海 南溪

冬牡丹  
冬菊  
寒菊

冬牡丹の松風を流ぬをちり  
温の菊やまをさき由兼牡丹  
くん菊のよちあまを物ぬし  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り  
冬菊やあまのしり一葉り

蒼虬  
南溪  
沙鷗  
梅裡  
一清

枇杷花

石落花

水仙

枇杷花のつぼみはあまのしり  
石落花のつぼみはあまのしり  
水仙のつぼみはあまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり  
水仙の名前らうまのしり

一草  
涼呼  
蒼虬  
沙鷗  
乙二  
升六  
蒼虬  
世南



水仙や清くみちの小灯を  
影くれを影を根づくも水仙  
根ありは水仙の心おひれ  
ぬもみは水仙の心おひれ  
も水仙の心おひれ  
水仙の心おひれ  
も水仙の心おひれ  
も水仙の心おひれ  
も水仙の心おひれ  
も水仙の心おひれ

▽ 蕩 老  
干 當  
鳳 朗  
木 海  
梅 室  
奇 鼎  
若 室  
芥 舍

大根引

大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ  
大根引の心おひれ

▽ 蒼 虬  
西 月  
虚 白  
一 茶  
沙 鷗  
梅 室

百集

百集

花彈の母

風呂吹

風呂吹や、糸をねを穿て天板の  
寺の湯お入く体むや大板ひ記  
一睡と書るはくりぬ大板む書  
凡る由り一人轉ひぬ大板穿  
風呂吹や、世々の中好一公寺

而 后  
素 屋  
樂 水  
芹 舎  
月 居

蕪

けぬる 蕪を切ると汁

梅 室

切干

切干 や、糸をねを穿て天板の  
小式部と書るはくりぬ大板む書  
川 吹や、世々の中好一公寺

梅 通  
士 朗  
一 具

葱

川 吹や、世々の中好一公寺

有巢の蕪林とに老は

馬と知小寺や、糸をねを穿て天板の  
俣 野と書るはくりぬ大板む書  
叩く書るはくりぬ大板む書

而 后  
蒼 虬  
梅 室  
玄 蛙  
呂 川  
蕪 村

納豆

納豆 俣野と書るはくりぬ大板む書

梅 室

藥

藥 俣野と書るはくりぬ大板む書

蕪 村

喰

喰 俣野と書るはくりぬ大板む書

呂 川

乾

乾 俣野と書るはくりぬ大板む書

梅 室

鮭

鮭 俣野と書るはくりぬ大板む書

葛 之

鯨

鯨 俣野と書るはくりぬ大板む書

曉 臺

鱈

鱈

生海鼠

生海鼠

生海鼠

生海鼠

生海鼠

生海鼠

河豚

河豚

鱈の鱈一まゝの鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

鱈の鱈の鱈の鱈の鱈

士朗

鳳朗

篤老

梅室

士朗

梅價

船海

士朗

乙二

卓池

木海

篤老

蒼虬

南溪

鳳朗

梅室

桃五

幾程の世をわたりてむ後其後  
あまのあやかしさうりたに何と降  
河豚汁の味をさききりてをさるる  
咲梅の本をさききりてをさるる  
飯汁やしらる梅の肉を流  
あまの世をわたりてをさるる  
河豚汁やしらる梅の肉を流  
飯汁やしらる梅の肉を流  
河豚汁やしらる梅の肉を流  
飯汁やしらる梅の肉を流  
河豚汁やしらる梅の肉を流  
飯汁やしらる梅の肉を流

百集

三五十一

牡蠣

緩提ふ内の相子を脱きたり  
飯汁やあつた人とゆき男  
火の赤く葉やは極の端乃下  
相切の味もあつたあつ汁  
侍り来て飯をさるる男を  
土壇もあつたやあつた  
あつたやあつたのあつたあつた  
梅尻乃形りもあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

其 嵐  
墨 池  
奇 鼎  
梅 敬  
芥 舍  
士 朗  
西 月  
井 眉  
乙 二  
鳳 朗  
世 南

鷹

琴人

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

梅 室  
鳥 頂  
二 鶴

暖鳥

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

虚 白  
卧 寅  
不 染  
蒼 虬  
鳳 朗  
萬 籟

百集

三五十一

十二月 臘八

我輩の本園にせむ十二月  
臘八や沼木むらさき守備の  
臘八や枯木に似たる梅くら  
臘八や風をあらはるる梅  
ら八もあつたの海りけり梅

遠摩淡

梅八や梅てくさぬ梅の春  
らふもあや山を離るる梅の春  
きのやうき梅に今よ角力取  
春の今あまの梅の春よ白丸  
胡起を思ひけり梅の春

木海  
✓ 篤光  
葛三  
蕉雨

寒入

寒梅

雪の春を梅の春からん梅  
雪の梅や折れた梅の春よ白丸  
梅の春よ今あまの梅の春

あまの梅の春よ

生地の梅の春よ梅の春よ  
あまの梅の春よ梅の春よ  
梅の春よ梅の春よ梅の春よ  
梅の春よ梅の春よ梅の春よ  
梅の春よ梅の春よ梅の春よ  
梅の春よ梅の春よ梅の春よ  
梅の春よ梅の春よ梅の春よ

梅室  
多代女  
木海  
沙鷗  
芥舎

早咲 冬椿

蒼虬  
鳳朗  
卧寅  
而後  
梅裡  
藏六  
蕪村  
月居  
鳳朗  
挑里

寒

東名渡海

船夜く月のさし西垂るさ哉  
きよひのふらけ物さ故あが  
きし雲の影揚りきさうれ  
空もれと軽き月の海に

夏乃海

空のさしし程あり楫劃さ  
空もれと月の過ちるあやかり  
庭み櫻しむきの骨さあは  
粉の子ぬち熱くはきさうれ  
空もれと白く雪なり都る

士朗

沙鷗

乙二

篤老

梅室

鳳朗

秋舉

来結

蒼虬

腰紙

寺へ来りて空を掲るきさうれ

丹波の国さうれ

物さしし炭の中はぬのさうれ  
空もれと松の小松の影さうれ

木海  
あはれなる海に舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて

浪速の海に舟をこぎて

世南

あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて

萬和

寒聲  
寒念佛

梅裡  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて  
あはれなる舟をこぎて

而後  
多代女  
柳下  
樊外  
巨挑  
蘭南  
芥合  
月居  
虚白

鉢敲

枯尾の木のさかばねに  
かきつけしや西のやまの  
物より改申の道に  
まじりてはさくさく  
世をゆくかたきりの  
神風の紅もさくさく  
辻に乃灯のけしき  
下系うねる男あり  
鉢敲はあやうき  
正月とおまつり

蒼 此  
士 朗  
道 彦  
鳳 朗  
葛 三  
梅 室  
卓 池  
篤 老

冬月

いつもあふくさくさく  
舟のゆくやまの  
晴や止んば  
あつと  
さうり  
あつと  
あつと

柳 湖  
奇 鼎  
芥 舍  
士 朗  
沙 鷗  
鳳 朗  
梅 室

百集

百集



戸口より草の遊波やまのりき  
けあひも人乃我の足あひ相  
隣より戸の影をぬやあめのお  
め死くともあつちをくまをれしき  
あまもよ海音坊くまをてあめのが  
まが板のたけふあをさむか  
ためくと所ふまぬあまのぬ  
よる戸にゆのきよくまのり  
乃を初る木の骨はたふるの月  
新法師の神へいぬれくまのぬ  
むすくく戸さくあま無たむのぬ

蒼虬  
木海  
卓池  
而后  
樊外  
朱明

寒月

きぬりまをまふまの力くま  
き月の越しあやむむさの松  
まのやまに人よむあ海一ま  
まのよれあを田をさる葉房の  
まの月や移しよのや乃を  
あむあやまにまのあ海丁の敷  
まのあのかあまよふああれ  
本城と枯木まの一年のつこ  
まのあまのあまのあ海板を  
まのあまのあまのあ海板の株  
まのあまのあまのあ海板の

士朗  
鳳朗  
木海  
世南  
蒼虬  
篤老  
梅室  
墨池  
儿芳

炭

分る事は隣にあらずとも  
 炭の火より自は物味しるる  
 炭を焼く物のまじりては  
 口解る事處にあらずとも  
 炭のまじりては物味し  
 炭を焼く事新しき事なり  
 炭のまじりては物味し  
 炭のまじりては物味し  
 炭のまじりては物味し  
 炭のまじりては物味し  
 炭のまじりては物味し

一茶  
 鳳朗  
 梅室  
 蒼虬  
 月居

炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる  
 炭の有れば物味しるる

士朗  
 素燦  
 卓池  
 沙鷗  
 木海  
 梅通  
 禾明  
 奇鼎  
 芥舎

楯

燈の如く二平にあり楯茶  
小屏の如く楯の如くあり  
楯茶の如くありて佛の灯  
を中へて茶室の如くあり  
茶室の如くありて楯あり  
楯乃火にたりてありてあり  
はれをせよとありてあり  
楯の如くありてありてあり  
お室此後ありてありてあり  
さしありてありてありてあり  
りてありてありてありてあり

鳳朗  
梅室  
一茶  
沙鷗  
木海  
而後  
梅裡  
芥舍

蒲團

布の如くありてありてあり  
出の如くありてありてあり  
下品あり

道彦  
鳳朗  
而後  
梅裡  
凍洞

衾

過の如くありてありてあり  
日ありてありてありてあり  
うの如くありてありてあり  
積の如くありてありてあり  
扱の如くありてありてあり  
ぬをとりてありてありてあり  
うの如くありてありてあり

而後  
梅裡  
凍洞  
二松  
墨池  
芥舍  
士朗  
標堂

百一

百一

紙衣

紙衣の海抄一巻のよきもの  
ぬくものよきものよきもの  
山の紙衣よきものよきもの  
万葉のよきものよきもの  
川にのよきものよきもの  
上巻のよきものよきもの  
洲のよきものよきもの  
新巻のよきものよきもの  
中巻のよきものよきもの  
紙衣のよきものよきもの  
よきものよきものよきもの

蒼 虬  
梅 室  
菊 洲  
蒼 虬  
木 海  
蕉 老  
蕉 雨

頭巾

折目ある世にきく今に紙衣のよ  
きものよきものよきもの  
紙衣のよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの  
よきものよきものよきもの

葛 之  
世 南  
土 龍  
芥 舍  
其 翠  
蒼 虬  
葛 之  
鳳 朗  
奇 鼎  
芥 舍  
鳳 朗

佛名會

佛名會のよきものよきもの

鳳 朗

師走

とちのこをくまなく梅のほきを  
師走めくみや果三平酒を弁  
太のふる世ふさくや師走人  
おののを吼焼くおと一丁守  
儀形りのおけくや子の師走うか  
新をり梅をささるる海をさ  
人あら身に殺うの師走をい  
用もたれ海をのみおをさ  
むく起し母の初やのこ  
一とや此罪おさるーや古あらみ  
おとこを賣はりたりとささるり

葛三  
道彦  
鳳朗  
蒼虬  
世南  
梅室  
多代女  
篤老  
寥松

煤拂

務もろく世のまやまを種  
まを掃く体くたの掃除を  
世をふる河くさ焼く掃く  
さゆや煤の掃方お者をと  
煤をさすも焼く白ひや赤燭  
まを掃くもまをさるる木をさるる  
お煤をさすも焼く掃く  
かみ川や煤掃くおの片掃り  
されをたもりのりもさす掃  
おのりもさす掃く煤の文

鳳朗  
道彦  
葛三  
篤老  
木海  
世南  
梅價  
外寅  
沙鷗  
而后

百集

百集

餅搗

ちぢまを搗きね小あはちうり危  
 我門へ来さうに志こり餅をり  
 餅屋の本屋くしちちりそり  
 りち花やふりちりて冬の上  
 せさそらやちりちりて冬の上  
 節季候のちりやちりて冬の上  
 本曾屋や葱のちりて冬の上  
 分一やと一本あめの餅をり  
 山原の暖さや  
 年木つむちりちりて冬の上  
 之儀はちりちりて冬の上

一月居  
 一茶  
 梅價  
 蒼虬  
 木海  
 鳳朗  
 篤老  
 梅裡  
 沙鷗

節季候

年用意

年木

年忘  
 年市  
 行年

ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 人の男をちりちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 年市ちりちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上  
 ちりちり搗き山原にちりて冬の上

椿堂  
 梅室  
 士朗  
 沙鷗  
 篤老  
 升六  
 西月  
 素屋

歳暮

遠くをたのむらむらとて年の暮  
一夜月くくくきりきりの音  
梅くれと影けりしはるるの暮

全貞憲歳晚

報ききくく報ききくく年の暮  
田の井にけりしはるるの暮  
澤にけりしはるるの暮  
猿まの橋とありやうの暮  
何まきくく今をうらむるの暮  
大振の嵐をまひやふふ代  
切りの影をまひやふふ代

士朗  
擗堂

篤老  
蒼虬

葛三

沙鷗

世南

初春

春待

節分

大節日  
小節日

年内五春

花の尾にけりしはるるの暮  
梅の影をまひやふふ代  
大振の嵐をまひやふふ代  
切りの影をまひやふふ代

梅室  
楓下  
齋堂  
文翠

春の暮の年乃夜を  
春の暮の年乃夜を  
春の暮の年乃夜を

芥舎  
鳳朗

豆おやち初ははるるの暮  
豆おやち初ははるるの暮  
豆おやち初ははるるの暮

葛三

折る人と花の暮せん梅は村

乙二

百集

百集

年内立春

位保婚しはめを退せ年の内

乙二

小晦日

控りやまをさあぐんをあて

沙鷗

大晦日

やまを世修りや年乃小晦日

漫々室

春分

大晦日のあつ西をさるる所

蒼虬

除夜

大晦日や風流の世ある日

蒼虬

除夜

おみあぐん灯てる除夜の柳

沙鷗

除夜

やまをやまのそりや高松の

奇鳥

除夜

おみあぐん灯てる除夜の柳

奇鳥

附録無季雜之部

画賛

世を露の世や人し修松り梅

篤老

大黒

おのりやうしつちのりおのり

士朗

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

世南

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

世南

名所

今白のりやうしつちのりおのり

蒼虬

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

蒼虬

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

蒼虬

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

蒼虬

鳥像

おのりやうしつちのりおのり

士朗



梅室のりり梅りや一の心  
梅心やかりはありさかき浦  
在利もやうぬ富士のる根を

士朗  
梅室

梅心よやう梅心やう  
公海のやうとらの花散るを

梅心よやう梅心やう  
梅心よやう梅心やう

梅心よやう梅心やう

梅心よやう梅心やう  
梅心よやう梅心やう

一茶

玉津島

梅心よやう梅心やう  
ハ島

梅裡

梅心よやう梅心やう

西月

南海漂遊

年賀 大賀の浪をき梅心の歌を

世南  
士朗

梅心よやう梅心やう

梅心よやう梅心やう

沙鷗

酒銘  
先松

松のうらとわらふ子雲を中ておて  
年月の醉をわすれし松のこ  
陶々たる松のまの松

沙鷗  
梅室

勸戒  
いづれありしを撫へてのま  
いづれありしを撫へてのま  
いづれありしを撫へてのま

沙鷗

松風子六回春不松守



萬葉真風已絶然  
詞林筆を極離護  
誰知松の蒼蒼影  
十七年の中閑る天  
松の葉を平題



ふたにふたのい  
今もあつたの  
ま

三橋

慎夏漫筆云扶桑名賢詩集載伊藤宗恕芭蕉子醺余輩東郊  
 別業話次有感而作詩由是觀之翁與坦菴諸詩人周旋可知矣  
 余嘗跋冠山老候所選芭蕉句集大全云相傳翁化去後檢其  
 帳中唯有一部杜律集解耳此豈翁之論衡乎故花安鶯梢亭  
 出鳥外馬上續夢等話往往融液為十有七字其左右逢原變  
 化敏妙不可思議是唯知詩者能知之矣豈翁之知詩者坦菴  
 諸薰陶之乎坦菴詩傑出于時流佳語尤多山舍千古意僧忘  
 百年身云々皆可傳矣

又六如菴詩鈔云萬象經吟便  
 覺清周流天下總知名觀身自省芭蕉脆卻為後人金鑄成又韓中秋詩  
 寂寞荒菴閉柴荆千年不朽此翁名國風以外新開徑雲水之間常寄生  
 夏草吟悲兵士夢古池句就躍蟻聲好將僅々十餘字包括天人無限情  
 俳壇推作佛佳句玉如清欲識翁奇處蕉窻聽雨聲雲山澤雉賢  
右過蕉翁墓作

類題發句百川集初編員外漢和俳諧之部

二日月日記

池邊のちりちりゆきとる漢和

旭のあけのうらみさうち

破風のうらみさうち

翁

煮茶の 蠅 避煙

素堂

合歡 醒馬 上

かきあつ小田のちりちり

翁

月代 見金 氣

堂

露 繁 添 玉 涎

池のちりちりゆきとる

翁

曉をたたりしやうの村中

掣<sup>テ</sup> 簾<sup>ラ</sup> 驅<sup>ル</sup> 偷<sup>ニ</sup> 鼠<sup>ラ</sup>

七葉の葉より乃の葉の葉紙を

くらゐの首をたきし松の換

乳をのむるは何をそと

舟<sup>ハ</sup> 鋸<sup>ハ</sup> 風<sup>ハ</sup> 早<sup>ハ</sup> 浦<sup>ハ</sup>

鐘<sup>ハ</sup> 絶<sup>ニ</sup> 日<sup>ハ</sup> 高<sup>ハ</sup> 川<sup>ハ</sup>

都よりよ苗の池よりとて

命をすけぬぬ火乃の乳

託<sup>ハ</sup> 教<sup>ニ</sup> 之<sup>ハ</sup> 社<sup>ヲ</sup> 奉<sup>ヲ</sup>

韻<sup>ハ</sup> 使<sup>ニ</sup> 五<sup>ハ</sup> 車<sup>ヲ</sup> 擲<sup>ニ</sup>

花<sup>ハ</sup> 月<sup>ハ</sup> 丈<sup>ハ</sup> 山<sup>ハ</sup> 開<sup>カシ</sup>

像をたつて老のうらみ

剪<sup>ル</sup> 銀<sup>ヲ</sup> 針<sup>ハ</sup> 一<sup>ハ</sup> 寸<sup>ハ</sup>

筆面乃の紙や玉を敷く

新ひけ紙の紙をくわし

夙<sup>ニ</sup> 殮<sup>テ</sup> 喉<sup>ハ</sup> 早<sup>ハ</sup> 乾<sup>ク</sup>

よとつて友の葉あつく林を

ゆり灯やをるゝ海の夕月

霧<sup>ハ</sup> 籬<sup>ハ</sup> 顔<sup>ハ</sup> 孰<sup>ニ</sup> 興<sup>ハ</sup>

震<sup>ル</sup> 浦<sup>ハ</sup> 目<sup>ハ</sup> 潜<sup>ニ</sup> 焉<sup>ハ</sup>

やんちのふもあつては

翁

堂

翁

堂

堂

翁

翁

堂

堂

翁

堂

翁

堂

堂

翁

翁

堂

翁

堂

わきとせぬ旅の敷席と紙巻

山伏山平地

門番門小天

鷓鴣窺水鉢

霜くくくくくくくくくくく

月あつと初階の露初に如きを

臨谷伴蛙仙

翁堂

翁堂

翁堂

翁堂

翁堂

都林泉名所

俳諧漢和表六句賦差峨名所

和陽韻賞嵐山花

嵐嶺櫻花擁之舫

子衿も猿も色ぬるを色も如り

詩成大堰陽炎燦

歌詠橋邊彩霓長

吹りくくくくくくくくくく

小聲のあつと比多屋乃嬌

籬島

今人附合集

萍の薄くけて流るるあり

江都 月鴻

孤螢向風行

簟上客撫脚

隣ありはらけけ半乃先

月静鴉聲噪

露重竹影輕

うせきたけむり色くはらぬ

名をくくはらぬ福もあはらぬ

時計驚醉夢

夜り此下よやほせをせ

竹如

鴻亭是鴻亭是鴻亭是

眼をくくの夢中へ落る蛇牛

二夜たまたまくはらぬ

雲飛月無色

葉乾風有聲

ほあやの物わらふとくかきつらじ

花守待花鼓

蕨採認蕨萌

顛蝶蹴馬糞

かきまはらぬをぬむはらぬ

竈煙唐津暮

江都

是亭鴻亭是鴻亭是

狸とくへことあはしりてり  
 仕事一とぬきまはしりてり  
 格氣似多情  
 とくへことあはしりてり  
 物の古來より世にたつてり  
 榎援石塔倒  
 薜補柴垣傾  
 ぬきまはしりてり  
 青陰下此新酒あまけり  
 家鴨蹲水盃  
 矮狗攪棋枰

亭鴻是亭鴻是亭鴻是亭鴻

畫閑鑿工  
 けあはして歩り極めをれく  
 足さへくはさめをれく  
 春色満江城

是亭鴻是

普陀落山房  
 若楓紅漸褪  
 池の面を起りて  
 獨りけり下夜を白乃音寂  
 京乃さあはしりて

大梅  
 抱儀  
 素撲  
 雲山

月澄ヲ園シ西シ小ク  
稻重ニ委カ蛇還ル

永叙ス城ニ生ケ依ル林ノ中ニ  
類ヲをシはシのヲ醒ス指ヲ然ル

門番門是宅  
野守野為田

如ク拂ハひクさニぬス意ノ多クをシふ  
愛情不售ラ錢ニ

板橋欺雪天  
惜離池不恐

携ハ去ル坂無縁

少シのヲ舞ハまルるハ胡ノ竹ヲ纏フ

十指瘦ニ於テ柝ニ  
長袖薄ク如ク蟬ノ  
曾テ待ス涼ノ臺ノ笛ヲ

尺ノ寸ノ指ノ長クをシてハあののの指ノ心ヲ  
耳ノノノ殺シ除クけテ無ク色ヲ執ルをシてハ  
足ノノノあののの身ヲ舞ハまルるハあののの身ヲ

高歌風散唾  
醉倒草沾涎

孤卓

撲郎采儀梅撲山采郎梅儀

郎采儀梅撲山采郎梅儀山



二三百いふるかゝるものさひあり  
机をひきよめて紙をまき寒き紙

望月 圓ニ團ニ子ヨリ

あつふやあつふあつふの夜カヨ

あつふの世路やいふ極多き邊より

魚 濃テ水ニ無レ夏

鐘 沈テ夜 似レ年ニ

晴たふやあつふの城はあつふの国

塞レ爐ヲ 三 疊 全ニ

儀 梅 撲 山 采 郎 梅 儀 山 撲

君水集

夕月やあつふのあつふの海しよ

霞 沈テ野 塘 悠カ

孤 鴻 飛テ向レ北ニ

酒を飲ふあつふのあつふの

口 斜テ吹レ火ヲ 竈

手 僂テ起ス霜ヲ 擧ゲ

取りけくあつふのあつふの

怪 巖 生ニ奇 竹ヲ

里より物々あつふのあつふの

芥 舍

飄 齋

舍 齋 〱 舍 〱 齋 舍 〱 齋

意りしをば後多岐は沙  
女をばはくを我雙と

月色如無夜

鐘聲似數秋

新若及此時分は松六の

折れ梅多俗士

摘れ菜却雅流

歌濡春兩軒

鐘乃矣此見也打つり

猫兒能戲禱

齋 舍 齋 舍 齋 舍 齋 舍

名のありしをば後多岐は沙

寺寂待茶傳

捨りての本史柳乃もひより

塵絶清瀧底

煙連雲烟頭

月影はくを我雙と

鐘聲似數秋

新若及此時分は松六の

折れ梅多俗士

摘れ菜却雅流

歌濡春兩軒

鐘乃矣此見也打つり

齋 舍 齋 舍 齋 舍 齋 舍

與輟沙上躑

人の走るもは布や立らん  
吹波の花も事おとすま合  
三陽未倦遊

齋舍齋舍

梅押箋

霽出りさきほの柳久  
春淺未渡湖

挑下

飄齋

午時北窓の空に平鐘の響はて

佐極さうのほろふ可隅

芥

舍

月昇人語絶

露降蟲聲蘓

種ちやい約ふぬおちるも重

白く足たてくつゆる切株

掌墨童嫌寺

彩紅女誇都

おあのおりに結を引揚る

泳まうたけりあけり

池のあまそめて世法了

下舍齋下舍齋下舍齋下舍齋

新酒 賑寒 厨  
蓑 乾日 竿  
鞋 湿 雨 半塗

白記 筆 此の條より

舍 齋 下 舍 齋

附言

右集末和漢俳諧を抄出さず事敢事偏を好む異を街あつ  
あつたもしく多かれ詩賦を歩路市事ハ生涯既中社得集証  
を棄れども甲子既好佐松乃中山より馬上張曼れ吟わさゆりく  
窓より下りた他晋子其角及以中世夜も奥藝村或ハ表水そ人  
如き他家者流より文才學識を為る者専ら謹法を弄ぶ取裡  
庶業彩實の果れ撰集是方りそる學流を盛せりし似るれども  
後世論定さるる如て早文一時の豪放より以て平東武の韻流大梅  
雲山等此數子詩文の傍正風の他方を考へて漢和の確作あり  
是又祖翁の高雅を今備豊満と云ふべし別巻より抄ふく物學此

準的と云或人余は謹和の式を問ふ然るに余は中門の能辨  
規則あり余は毎尺況謹和有り於る物也世も徳士と其對  
今一巻を窺ふの如く其擧小傲し何う詩家の例格拘泥  
せんや空けりて自こま直角を去り言の麻梨をとりて  
假令句の韻脚を假用ゆし細く猿蓑炭俵の外に求むるは  
是余の常と社法を教戒は通ふ心也官中人余の差を肯て  
卒業稿既し成り及び投函して此數言を添へて示す

嘉永二年ふく中流

獨坐散人飄齋識

と赤穂のしと遊ふ山内のお能は  
とや細葉の落もさるるの如く  
あゝと云ふもさるる深き田  
細も其の如くさるるあらぬさるる  
野中の流水の心さるるさるる  
川流柳の如くさるるさるる  
あやまちの如くさるるさるる

一とくせんこくそそのまのさう枝を  
 り先燕してあ尺のあやう氷うさ  
 じしんをやひり奪むる係人け  
 誰ても一葉つきの道と濤うの  
 一の流を一掬して清濁を味のみ地れ  
 信土飄々霧かりくたひ其安芹念を  
 示しらひ一ツれと書さしめ

百川集を石付濤ちけひくも世は其くも  
 人々の句をもちとあけられ一とく  
 彼あより逆巻く清き流もくは銭  
 うき濁るるれは殊ささまはむ心  
 おしなまうとれを其書をさしめさ  
 せこれの爰るあうはひく  
 山川の流をわき調り岩垣水の幽然

姿月くあゐのなほおりゆく硯の海  
 みるえいねく廣く撰へるあまのこ  
 みらる遊らんはは神の湊乃袖よと  
 えゆめのころのみろとるなまこ紫のお  
 りろき侍んのれや

洪水国其集

陶鄰居大人輯獨笠叟補正

近今名家類題發句百川集二編

嗣刻四墨雜之部全五冊

此編は主て專今海内高名家の近作を集  
 め且前集に洩せし士朗蒼虬と二叟始免  
 諸哲乃秀吟をくるとなまこ初ん他例乃  
 大成集思くく此出の右に知るはさるは  
 國所俗称別号近く記し中よハモ  
 人々の奇行小傳淺學と文信の風交及ひ  
 行脚漫遊の便アリ

百川集作者近今俳士通名録

近刻東西國分全三卷

近今名家俳諧百家選

同懷中横本全三冊

士朗蒼虬梅室三大人をくくし餘名家  
 附合百卷を撰り凡渡り一丁は三十六句  
 の記し月花の定座ホ殊に目安くし  
 俳席必携其活書とのふハ

古修舎黙池大人輯

名家發句俳諧一掬集初篇二篇三篇

三集合中本十冊既刻四篇近日出版

當今國々俳家の新派をびやう  
 集刻し流行をせし示し必用の集  
 冊アリ

嘉永元年戊申集成

同 二年己酉葦板

心齋橋筋博労町角

河内屋茂兵衛

同 安土町角

河内屋儀 助

同 北久室寺町南丘入

河内屋源七郎

同 北久太郎町北久

河内屋喜兵衛

浪華書肆

俳諧書目

文栄堂 大阪心齋橋通北久室寺町 河内屋源七郎板

芭蕉翁附合集評註篤老編 二冊

芭蕉一冊の附句は解して見ると

古今句鑑 素外選 四冊  
同 拾遺 四冊

俳諧十家類題集 五冊

芭蕉を南風を春風を夏風を秋風を言水は法未山希因等村右十人自白紙にして題集也

新十家俳句集 四冊

士朗 月居 茶地 遠夫 完東 成美 升六 多助 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

新五子稿 蕉の中興多人 五人の自白多々 二冊

俳諧俳句題集 升六選 五冊  
半化坊俳句集 二冊

菟句題林十二月抄

小本全一冊

古人の自白多々十二月おかけは名あるもの又好くしらすはよむの事と和清の事と引くくうの事俳句の候りし



花屋菴校  
芭蕉袖艸紙

第一巻のくわいふん奉  
月次書をよむおりの  
変用と記し全三冊

芭蕉翁七書

行持達二十五巻土記  
句合嘆味り記後句集  
小本二冊 奥付細志 必合判

流行七部集

月居完東より湯  
湯時ゆりの和自記  
著述七部集也

四季併題櫻苗

花屋菴家四月  
並並及句集  
全二冊 一七句多集也

蕨句二傑集

唯ふふふふふふ  
たふふふのふふふ  
一冊

蕨句類集

五非乃木優著  
全五冊

俳諧季寄圖會

四季 雜  
全部十五冊

季寄摺火打

古板と板心  
新圖の出し  
再板二冊 婦人の便  
増補花火草 立圃著  
小本一冊

季寄絹節

三切懐中本  
全一冊

俳諧宗祇庚

五冊

流行百家句集

廿六邊  
全四冊

# 書 林

江戸日本橋通二丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 三嶋町

和泉屋吉兵衛

同 浅州茅町二丁目

須原屋伊八

同 兩國横山町二丁目

出雲寺萬次郎

大隠齋橋通北堂寺町

河内屋源七郎板

淋書

同

同

同

同

同

同

同

出

同

同

同

同

同

同

卅

卅

